

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 30 日現在

機関番号：72810

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01351

研究課題名(和文)ギリシアとメソポタミア世界を結ぶ：紀元前2千年紀前半アナトリア交易網の西方拡大

研究課題名(英文) Connection Greek and Mesopotamian World: Western Expansion of the Anatolian Trading Network in the First Half of the 2nd Mill. BCE

研究代表者

松村 公仁 (Matsumura, Kimiyoshi)

公益財団法人中近東文化センター・アナトリア考古学研究所・研究員(移行)

研究者番号：60370194

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要(和文)：中央アナトリアに位置するビュクリュカレ遺跡は、考古学的調査によりヒッタイト王家との強い結びつきを示す遺物が複数出土し、文献研究からはヒッタイト王家にゆかりある都市ネナッサの可能性が提起された。また、ビュクリュカレの破壊層の年代はネナッサの破壊された歴史と一致した。さらに当遺跡で出土したガラス壺はフリとの強い結びつきを示し、文献資料によればネナッサはフリと手を結びヒッタイトを侵略したとされる。これらのことからビュクリュカレ遺跡が古代都市ネナッサであった可能性は極めて高い。この研究成果は前2千年紀前半のメソポタミアとアナトリア両地域間の交易網の西アナトリア、エーゲ海地域への拡がりを示唆する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、前2千年紀前半のメソポタミアとアナトリア両地域間の交易網が西アナトリア、さらにはエーゲ海地域への拡がりを示唆する。交易網のエーゲ海地域への拡がりにはメソポタミア文化のギリシャへの伝搬を裏付けるものである。さらにビュクリュカレ遺跡と古代都市ネナッサの同定は、この時代のアナトリアにおいて古代名が同定された都市は数えるほどしかない状況において極めて大きな成果といえる。さらに、従来ヒッタイト王家の居住地でのみ出土していたフリ語楔形文字粘土板文書が当遺跡で発見されたことは、従来のヒッタイトの定説を大きく塗り替える潜在的意味を持っている。

研究成果の概要(英文)： Through the archaeological excavations at Buklukale, several finds indicate a strong relationship with the Hittite Royal Family. Additionally, philological researches have proposed the ancient name of the site as Nenassa which had associations with the Hittite Royal Family. Moreover, the destruction history of the city Nenassa elucidated from the philological researches, and the dates of the burnt layers of the site derived from the excavations are coincide. Just as Nenassa had dealings with the Hurrians and attacked the Hittites, in the same way the glass bottle found at Buklukale verifies the strong connection of the city with Hurrian culture.

These results suggest that it is very possible that the ancient name of Buklukale was Nenassa. They may even indicate that the trading system between Mesopotamia and Anatolia in the early 2nd Millennium BC extended as far as West Anatolia, and was possibly connected to the Greek culture in the Aegean region.

研究分野：アナトリア考古学

キーワード：ビュクリュカレ遺跡 トルコ共和国 アナトリア カールム時代 アッシリア商業植民地時代 ヒッタイト 紀元前2千年紀

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ビュクリュカレ遺跡の発掘調査ではこれまで3枚のヒッタイト語楔形文字粘土板文書が出土しており、これらがアナトリアにおいて最西端の出土例である。この粘土板文書は外交文書で、辺境地西アナトリアにあった国との抗争関係を示している可能性が高い。このことから当遺跡は西アナトリアとの関係を色濃く持っていると考えられるようになった。

なぜ紀元前17世紀に始まる古ヒッタイト時代にクレタ島に見られるアクロバット図像がアナトリアに見られるのか？建築遺構においてはギリシア都市ミケーネに見られるポテルンと呼ばれる地下通路がなぜヒッタイトの首都ボアズキョイ、シリアの都市ウガリットに共通して見られるのか？これらは今日まで理解されてこなかったが、これらの文化が密接な関係を持っていたからではないか、というのが本研究の着想に至った経緯である。

さらに古ヒッタイト時代には明確な形で現れる文化的影響関係は、その前の時代から始まっていたはずであり、アッシリア商業植民地時代にその手がかりを見出せるはずと考えた。この時代、メソポタミアとアナトリアは錫の交易を通して盛んな交易が行われていたことは、キュルテベ遺跡出土の楔形文字粘土板文書によって明らかとなっている。この文書研究によればカニシュ(キュルテベ遺跡)、プルシャンダ、トゥルミッタそしてワシユシャナが交易の4大基幹都市であった。このうち前者1遺跡のみが同定されている。これら4大都市が同定された場合、交易網の大枠が理解できるため、地名考証研究において決定的な役割を持つ。ビュクリュカレ遺跡は未同定の後者2都市の候補地として提案されており、この都市の古代名の同定は今後の研究進展の決め手となる。これまでの研究活動から特定までにはあと1歩まで迫っているという状況である。

2. 研究の目的

古代ギリシア文明とメソポタミア文明は、両者の影響関係を否定し、独自発展したものであるという歴史観が長く古代史研究を支配した。本研究ではその視点を根底から否定し、両世界は古くから影響関係にあり、一つのシステムの中で発展してきたことを示そうとする。本研究では前2千年紀前半に存在したメソポタミアとアナトリア両地域の交易網がギリシア世界にまで及んでいたことを、両地域に狭まれているアナトリア高原のほぼ中央部に位置し、2009年来継続して発掘調査を行っているビュクリュカレ遺跡の考古学的調査と文献研究から解明し、これまで独立した形で論じられることが多かった両文明の関わりを示し、現代西洋文明につながるメソポタミア文明という新たな視点を生み出そうとする。

3. 研究の方法

本研究では今日までの地名考証研究で主要な交易都市の相対的な位置関係が把握されていることに着目し、ビュクリュカレ遺跡の古代名を解明することで前2千年紀前半のアナトリアにおける交易網を把握し、それがエーゲ海地域にまで広がっていたことを裏付ける。研究は以下の3領域において行った。

1. ビュクリュカレ遺跡発掘調査
2. 都市部の地中探査
3. 楔形文字文献研究

これら3領域の研究をまとめ、最も妥当な古代都市名を導き出した。

1. ビュクリュカレ遺跡の発掘調査

調査の目的は遺跡の歴史の把握である。これまでに岩山頂上部において前2千年紀に属する大型建築物と3火災層を内包する9建築層を確認した。本研究では各層のより正確な年代を知り、詳細な遺跡編年を構築することに焦点を絞り、発掘を行った。

2. 地中探査

地中探査では、発掘調査を行わずにビュクリュカレ遺跡の都市の性格を理解する方法を模索する。これまでに行った磁気探査結果を元に電気探査、レーザー探査を組み合わせることで最良の結果を得られるよう戦略を立て、都市構造を解明し、都市の性格の把握に努めた。これまでの地中探査結果から3建築層が確認されている。その中で最上層に位置する最も新しいものがヒッタイト時代の箱式城壁を含む建築層である。それゆえ都市部の地中探査ではヒッタイト時代の都市の様相が最も良く理解できるはずである。ヒッタイト時代の都市構造を解明し、都市の性格を理解する。本研究はアッシリア商業植民地時代についての研究であるが、この都市のヒッタイト時代の様相は、ヒッタイト語文献研究の成果と比較する際に極めて重要な意味を持つ。

3. 文献研究

文献研究では、アッシリア商業植民地時代、ヒッタイト時代の楔形文字文献からビュクリュカレ遺跡にあった都市の古代名の候補を選定した。その際、地理的立地を検討し河の近くに位置する古代都市の歴史をまとめる。アッシリア商業植民地時代の都市の歴史だけでなく、ヒッタイト時代の歴史も検討することで候補都市を絞り込むことが可能となる。都市によってはアッシリア商業植民地時代にはカールム(商業都市)が存在し、交易において重要な役割を

果たした都市が、ヒッタイト時代にはほとんど文書に登場せず、その重要性を失ったものがあり、その逆もある。また、ヒッタイトの文献にはどの王がどの都市へ遠征し、征服したのか、あるいは降服し開城したのか等の史実が記載されている。これは発掘で確認された火災層と関連してくる。この 10 年間の発掘調査を通して文献研究の分野ではビュクリュカレ遺跡の重要性が認識されるようになった。その結果、これまでに 5 つの古代都市が候補として挙げられている。

地名考証研究：研究成果の統合

上述した 3 領域における研究成果をまとめ、現段階における最も妥当な古代都市名を導き出す。発掘調査の結果、ビュクリュカレ遺跡の都市は前 2 千年紀に最低 4 回焼失している。これらの火災の年代を特定することにより、どの王の時代に焼失したのか理解できる。このようにして組み立てたビュクリュカレ遺跡の歴史と地中探査で解明された都市構造を、文献資料研究から得られた候補都市の歴史と比較することで最終的な候補都市を絞り込むことが出来る。こうして特定された古代都市をビュクリュカレ遺跡の場所に落とすと、その都市と関連した周辺都市の位置、通商路も自ずと決まってくる。最終的にはアナトリア交易網が復元され、ギリシア世界とのつながりも明らかとなる。

4. 研究成果

前 2 千年紀前半に存在したメソポタミアとアナトリア両地域の交易網がギリシア世界にまで及んでいたことを裏付けるうえで重要なのがビュクリュカレ遺跡古代名の同定である。本研究の考古学的発掘調査、文書資料研究を通して以下のことが理解された。

1. 当遺跡からはメソポタミア、北シリア地域に居住していたフリ人が発展させたとされるガラス製作技術を用いて作られたガラス壺が出土した。これは前 16 世紀に年代付けられ、世界最古のガラス壺の一つであり、該当地域との密接なつながりを示している。

2. 出土遺物の研究を通して、当遺跡からヒッタイト王家との結びつきを示す多くの遺物が確認された。

- a. ヒッタイト王に宛てられたとみなされるヒッタイト語楔形文字粘土板文書の出土、
- b. 2019 年に 2 点目が出土したヒッタイト王 / 王妃の印影、
- c. さらに 2019 年、2021 年に出土したフリ語楔形文字粘土板宗教文書である (図 1)。フリ宗教儀礼と関連するこの粘土板文書はヒッタイト王 / 王妃によって執り行われた儀礼に用いられたものとされ、ヒッタイト王 / 王妃が少なくともこの遺跡を訪れ、儀礼を行っていたことを示唆する。

3. 一方で文献資料の地名考証研究により、クズルウルマック河 (赤い河) 沿いのビュクリュカレ遺跡の立地を考慮し、大河沿いに位置する当遺跡の古代都市名として提案された 5 つの候補中、ヒッタイト王家にゆかりのある都市として、唯一ネナッサが浮かび上がった。ネナッサは初代ヒッタイト王ハットゥーシリ I 世の息子の一人とされるピンピラにより統治したとされる。

4. 次に楔形粘土板資料に記載されている都市ネナッサが侵略、破壊された歴史を調べ、ビュクリュカレ遺跡発掘調査で明らかとなった火災層を比較した (図 2)。

a). ハットゥーシリ I 世の統治下、ネナッサはフリと結託し、ヒッタイト領を侵略したため、アルザフに遠征中のハットゥーシリ王は引き返し最初にネナッサを攻略しようとしたところ、ネナッサは降伏し戦わずして門を開けたとされる。それ故ネナッサからフリゆかりのガラス壺が出土し、なおかつこの時期に破壊による火災層が存在しない点が符合する。

b) トウドゥハリヤ王の時代に黒海沿岸のカシュガ民族がヒッタイト領内に侵入し、クズルウルマック沿いのネナッサを国境としたとされる。この時期にビュクリュカレ遺跡には火災層が存在している。



図 1: フリ語楔形文字粘土板文書

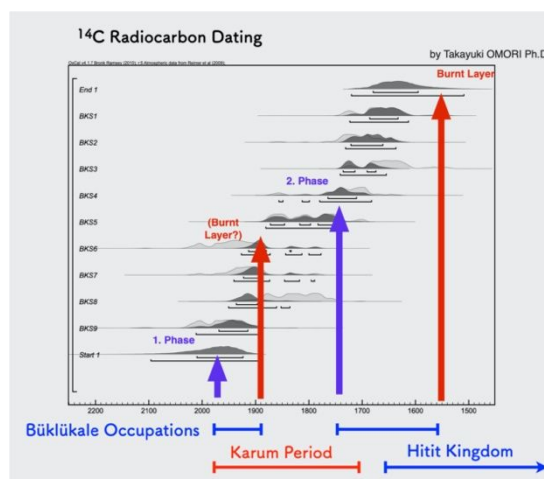


図 2: 火災層の放射性炭素年代測定結果

このようにネナッサの歴史とビュクリュカレ遺跡調査で確認された破壊層の年代が一致した。

5.さらには出土したフリ語楔形文字粘土板に登場し、一部残存する「ズ」で始まる河の名前が、地名考証研究で都市ネナッサの境界にあったとされる河の名前「ズリヤ」と適合した。

これらのことからビュクリュカレ遺跡の古代名がネナッサであった可能性が極めて高いことが今回の研究で示された。古代名同定自体極めて稀な成果であるうえに、この結果は従来の交易網のあり方を修正するとともに、交易網が従来の想定よりも西に広がっていたことを示すものであり、当初の研究目的であった交易網の西アナトリアへの拡がりについて大きな貢献を果たすことが出来た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Matsumura Kimiyoshi	4. 巻 83
2. 論文標題 New Evidence on Central Anatolia during the Second Millennium BCE Excavations at B?kl?kale	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Near Eastern Archaeology	6. 最初と最後の頁 234 ~ 247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1086/708506	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Andrew S Fairbairn, Nathan J Wright, Mark Weeden, Gojko Barjamovic, Kimiyoshi Matsumura, Ron Rasch	4. 巻 28/3
2. 論文標題 Ceremonial plant consumption at Middle Bronze Age Buklukale, Kirikkale Province, central Turkey	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Vegetation History and Archaeobotany	6. 最初と最後の頁 327-346
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s00334-018-0703-x	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Hajime, Yamamoto	4. 巻 55
2. 論文標題 The Concept of Territories and Borders in Hittite Royal Ideology	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Orient	6. 最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Kimiyoishi Matsumura
2. 発表標題 Kirikkale, Buklukale 'de M.O. 3. Binyila Ait Bulgular
3. 学会等名 Webinar: M.O. III. Binyilida Anadolu (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松村公仁
2. 発表標題 ビュクリュカレ：赤い河の畔のヒッタイト都市
3. 学会等名 同志社大学－神教学際研究センター（CISMOR）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kimiyoshi Matsumura
2. 発表標題 From Assyrian Colony Period to the Hittite Period
3. 学会等名 Ege University, Protohistory and Near Eastern Archaeology（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kimiyoshi Matsumura
2. 発表標題 Buklukale Kazisi 2017
3. 学会等名 41. Uluslararası Kazi, Arastirma ve Arkeometri Semposyumu（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mark Weeden, Kimiyoshi Matsumura
2. 発表標題 Mass Participation in Ritual Activity in Second Millennium BC Anatolia
3. 学会等名 First International HFR Symposium Cult, Temple, Sacred Spaces: Cult Practices and Cult Spaces in Hittite Anatolia and Neighbouring Cultures（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 Kimiyoishi Masumura	4. 発行年 2020年
2. 出版社 PEETERS	5. 総ページ数 489
3. 書名 Alalakh and its Neighbours: Proceedings of the 15th Anniversary Symposium at the New Hatay Archaeology Museum, 10-12 June 2015 (Ancient Near Eastern Studies Supplement)	
1. 著者名 Kimiyoishi Matsumura	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Ministry of Culture and Turizm, Republic of Turkey	5. 総ページ数 662
3. 書名 41th International Symposium of Excavations Vol. 3	
1. 著者名 山本 孟	4. 発行年 2021年
2. 出版社 同志社大学一神教学際研究センター	5. 総ページ数 150
3. 書名 古代近東の国際社会における多様な文化ー考古学および文献学によるアプローチ	
1. 著者名 Hajime Yamamoto	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Harrassowitz	5. 総ページ数 -
3. 書名 It All Began with Stratigraphy and Chronology: Archaeology in Central Anatolia	

1. 著者名 Kiniyoshi Matsumura	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Harrassowitz	5. 総ページ数 -
3. 書名 It All Began with Stratigraphy and Chronology: Archaeology in Central Anatolia	

1. 著者名 Kultur Varliklar ve Muzeler Genel Mudurlugu	4. 発行年 2019年
2. 出版社 T.C. Kultur ve Turizm Bakanligi	5. 総ページ数 738
3. 書名 40. Kazi Sonuclar Toplantisi 2. Cilt	

1. 著者名 Suel, Aygul	4. 発行年 2019年
2. 出版社 TC Corum Valiligi	5. 総ページ数 1279
3. 書名 Acts of the IXth International Congress of Hittitology, Corum, 08-14 September 2014	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>ビュクリュカレ http://www.jiaa-kaman.org/jp/excavation_buklukale.html ビュクリュカレ遺跡 http://www.jiaa-kaman.org/jp/event/03.html ビュクリュカレ：赤い河の畔のヒッタイト都市 https://www.youtube.com/watch?v=vAPevJCpEX4 Webinar: M.O. III. Binyilida Anadolu https://www.youtube.com/watch?v=cj3l7lco_rs ビュクリュカレ http://www.jiaa-kaman.org/jp/excavation_buklukale.html アナトリア考古学研究所 http://www.jiaa-kaman.org/jp/index.html</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山本 孟 (Yamamoto Hajime) (90793381)	山口大学・教育学部・講師 (15501)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大村 幸弘 (Omura Sachihiro)		
研究協力者	大村 正子 (Omura Masako)		
研究協力者	熊谷 和博 (Kumagai Kazuhiro)		
研究協力者	福田 勝利 (Fukuda Katsutoshi)		
研究協力者	ウィーデン マーク (Weeden Mark)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

英国	Dr. Mark Weeden	School of Oriental and African Studies	University of London	
英国	Prof. Dr. Julian Henderson	Department of Archaeology	University of Nottingham	
オーストラリア	Dr. Andrew Fairbairn	School of Social Science	The University of Queensland	
トルコ	Serap Ozdemir	Faculty of Fine Arts	Ankara Haci Bayram Veli University	
英国	School of Oriental and African Studies	University of London		
オーストラリア	School of Social Science	The University of Queensland		
トルコ	Department of Archaeology	Faculty of Arts and Sciences	Ahi Evran University	